

ニュータウンを

京都で最初のニュータウン。
竹の産地として知られる大枝・大原野にあり、
造成前は丘陵地の六割近くが竹やぶで、
残りが柿畑などの農地。
今でも青々とした竹林がひろがり、
竹はこの街のシンボルともいえる。

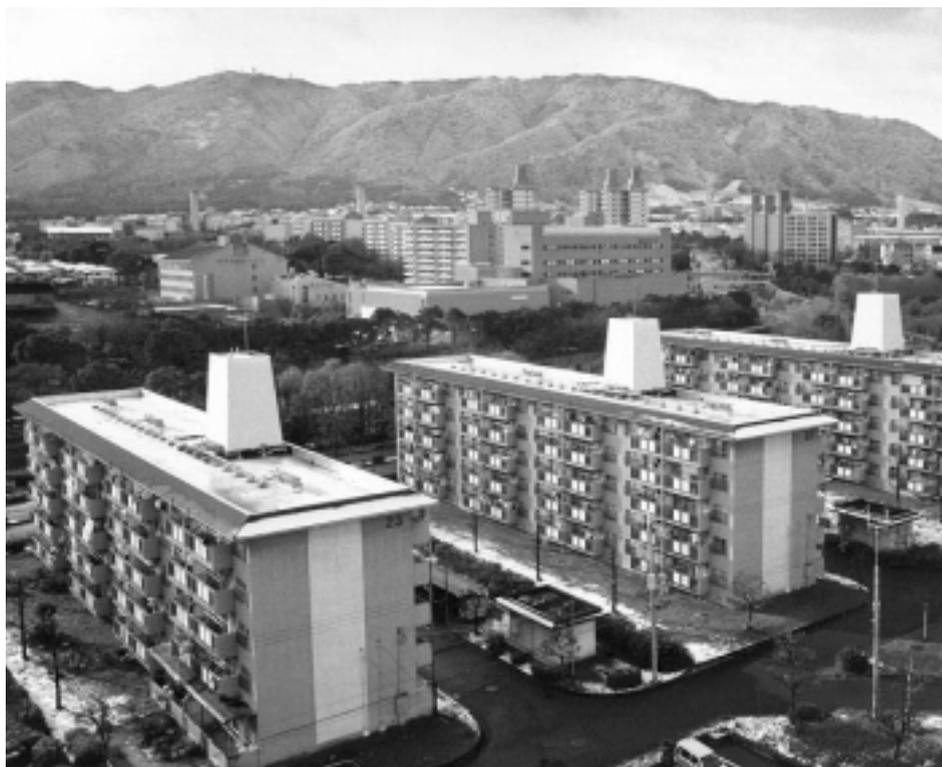


京都・洛西



歩く





[連載] 町に出会う Vol.8 太田 順一 Junichi Ota





自然の めぐみ

取材協力
 洛西ニュータウン管理公社
 福西児童館
 千安農園
 洛西高校茶道部
 竹の里小学校ふれあい芸術ルーム

原稿を書かなければならぬとき、私はよく散歩に出る。家でじっと机に向かっているより、そのほうがいい考えが浮かんだり、頭のなかをすっきり整理できたりするよくな気がするからだ。

私の家は奈良市の外れのベッドタウンにあって、住宅地を抜けて池のほとりになると、東に若草山、西に生駒山





を遠く望むことができる。その池の周りを小一時間歩くのだが、草むらに花を見つけるとしゃがみ込み鋭い鳥の鳴き声に立ち止まって梢を見上げ、甲羅を干す亀にふと脈絡もなく昔のことを思い出す。たそがれどきなら、落日に染まった山の美しさに茫然と見入ってしまう。

結局いつも、原稿のことなど何ひとつ考えないまま帰ってきて、そして机

の前で呻吟するはめとなる。でも気分は一新されたのだから、散歩の効用はあるというものだ。

町なかの長屋暮らしが見直されている。若い人たちが古い長屋を改修して、住居だけでなくアトリエや店舗として活用しているのを私も取材で見て回って、その人間の身の丈に合った生活空間の程よい小ささに魅力を感じている。若い人なら逆に都心で暮らしたいとの思いもあつたから、なおさらだ。

一方で、散歩に出たときに味わえる豊かな自然の恵みが、今いる場所に私を引きとめる。

アナーキーに増殖してきた都市の市街地に比べ、郊外のニュータウン、なかでもデザインのしっかりしたところでは、自然の地形をうまく生かして街が造形されている。そんなニュータウンを歩いていて、「ここに住めたらいいな」と思える一瞬がある。それは、川や丘に沿った散歩につづつつけのコースを見つけたときである。

CEL

おおた・じゅんいち

一九五〇年、奈良県生まれ。早稲田大学政治経済学部中退後、大阪写真専門学校卒業。写真集に『女たちの猪飼野(畠文社)』、『大阪ウチナンチョ』、『化外の花(以上、ブレイクセンター)』、『ハンセン病療養所 隔離の九〇年』、『ハンセン病療養所 百年の居場所(以上、解放出版社)など』。